

村上春樹の作品における建築空間の現代的特質

文学の中の建築 その2

○正会員 鈴木 雄一郎¹
同 張 奕文²
同 近藤 正一³
同 早瀬 幸彦²
同 中川 景子¹
同 若山 滋⁴

【序論】戦後生まれの村上春樹はデビュー作の『風の歌を聴け』で群像新人賞、『羊をめぐる冒険』で野間文芸新人賞を受賞し、『ノルウェイの森』が大ベストセラーとなるなど多くの現代人の支持を得ている作家であり、作品を通じて60年代後半の混乱の時代以降の「豊かさ」の中に生きる若者の姿を描いている。本研究ではこれまで漱石・鴉外・谷崎・川端などの近代文学作品の中の建築空間に関する研究を行っているが、本研究では現代日本を表徴する作家である村上春樹の作品を取り上げ、そこに現れる建築と都市空間を分析し、村上春樹の文学作品における現代の空間像の特質を探ることを目的とする。

【研究対象・方法】村上春樹の代表的な作品である『風の歌を聴け』『1973年のピンボール』『羊をめぐる冒険』『ノルウェイの森』『ダンス・ダンス・ダンス』の5作品を研究対象とし、以下の考察を行う。1) 作品中に出現する建築と都市に関する用語を建築用語として抽出し、建物、部屋、部位、建具・部材、家具、庭、都市施設、地名、国名、交通機関、その他に分類して集計

する。2) 作品の舞台となる空間の文章量(文字数)を作者及び読者の意識時間として集計し、舞台の空間的な流れとその構成を考察する。3) 建築と都市に関する空間表現を抽出し、作者の空間意識を考察する。

【建築用語の頻度】5作品における抽出された建築用語の合計のうち頻度の高いものを表-1に示す。また作品別、作家別の建築用語の分類別構成比をそれぞれ図-1、2に示す。[家具]の比率は20~25%であり他の近代文学作品よりもかなり高い比率で、これは村上春樹の描く現実が「モノ」にあふれた高度資本主義社会であることを現している。空間についての叙述は、家具などの「モノ」の色や配置や大きさによって描かれていることが多い。[建物]は「家」が最も多いが「ホテル」「いるかホテル」「ドルフィン・ホテル」は同じホテルのことを指しており実際には「家」よりも「ホテル」の方が多く舞台となる時間も長い。[庭]は全体としては少ないが、「井戸」が際だって多く見られる。「井戸」は主人公の自閉や内向する自分の心模様を表すメタファーである。全般的な特徴としては、畳や和室など日本的な表

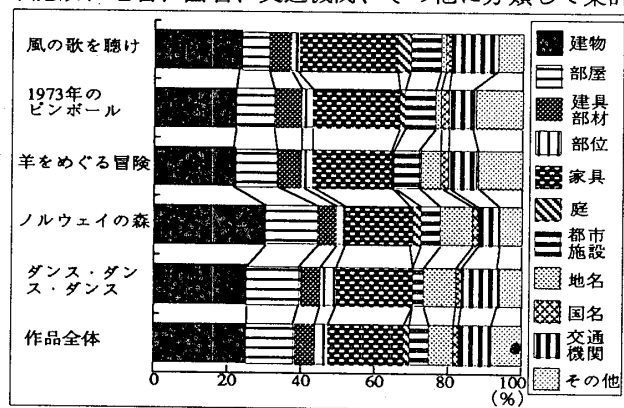


図-1 建築用語の分類別構成比 (作品別)

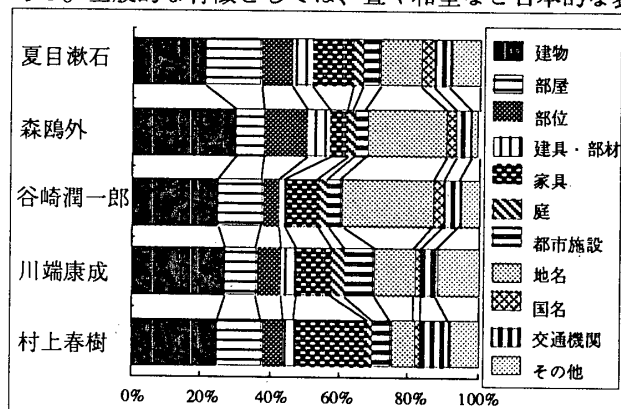


図-2 建築用語の分類別構成比 (作家別)

表-1 頻度の高い建築用語

建物	2806	1642	1425	675	388	2324	156	576	769	172	959	912
	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数	回数
1 家	323	174	516	243	243	465	61	129	155	36	284	185
2 ホテル	256	164	95	144	35	221	44	96	71	17	55	127
3 店	158	97	85	87	32	204	22	59	43	13	55	62
4 大学	129	122	68	67	12	107	5	26	42	10	53	43
5 アパート	127	40	63	27	12	86	4	24	41	9	47	30
6 いるかホテル	99	76	44	24	12	85	4	22	28	6	46	25
7 寮	80	52	40	10	5	81	3	21	22	5	45	18
8 学校	79	75	39	7	5	73	2	17	12	5	35	18
9 会社	67	65	38	7	4	65	2	17	19	4	21	17
10 ドルフィン・ホテル	58	47	36	6	3	49	2	13	17	4	18	16

注) 表の一番上の数字は各用語の頻度の合計

Architectural space in Haruki Murakami's works

Architectural space in Literature part.2

SUZUKI Yuichiroh et al.

現は殆ど見られないが、「ベッド」「ソファー」など現代的なライフスタイルを表現する用語が目立つ。これは村上春樹の文学がアメリカ的と指摘されるところであろう。

【舞台の推移】図-4の舞台分類別構成比をみると5作品に共通して「自宅」の比率は平均10%程度で、これは他の近代文学作品と比べて圧倒的に少ない。これは主人公にとって「自宅」は本当の居場所ではないことを表し、「自宅」は現代という空虚な時代の、ある都市の一角に存在するひとつの建物としてしか描かれていない。現実の空間に現実感が持てない主人公が、現実感あるいは自分の存在感を確かめるために非現実の世界へと繰り出すという図式が「1973年のピンボール」や「ダンス・ダンス・ダンス」の中に特に顕著にみられる。このように「現実-非現実」を軸に推移するのが村上春樹の作品の舞台推移の特徴であると言えよう。

【建築表現】村上春樹の作品に現れる現実の建築空間は形容詞的な表現が少なく、希薄で無個性で均質に感じられる。村上春樹はこの無個性な状態に現代の空虚というものを重ね合わせている。家具や調度品など「モノ」に

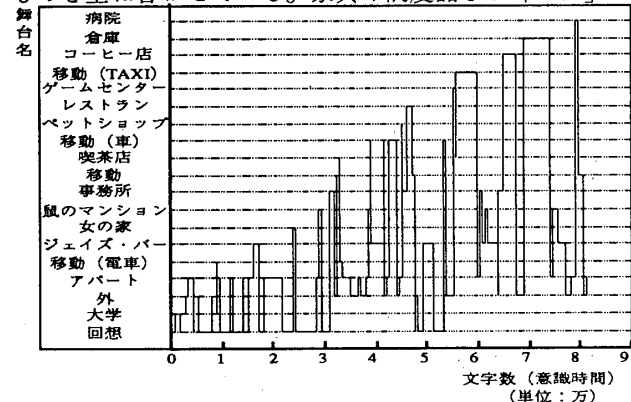


図-3 「1973年のピンボール」舞台推移図

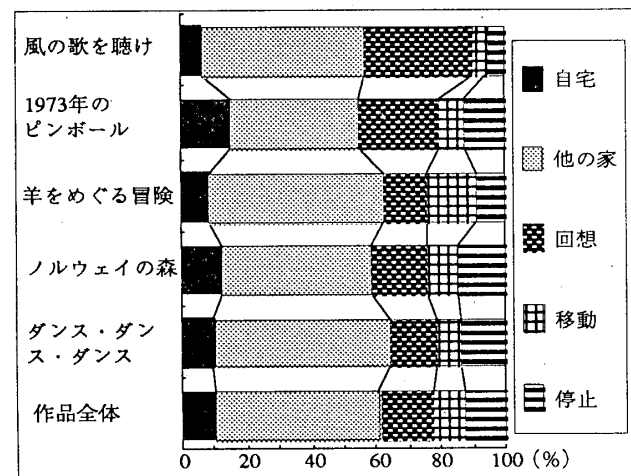


図-4 舞台推移構成比

ついで表現は多いがその空間の匂いや色や温度など感覚的な表現が乏しい。一方、非現実の空間は現実の空間よりも建築表現の文章量が圧倒的に多く、よりリアルに表現されている。また非現実の空間は、「暗く」「寒い」イメージで描かれているのが特徴で、主人公にとってはむしろ非現実の空間の方に、より強い実在感があるように描かれている。

【結論】60年代後半の混乱の時代以降の「モノ」にあふれた見せかけの豊かさの蔓延する空虚な時代を描く村上春樹は、現代社会の風俗的な環境からの影響を無抵抗に受け入れながら現実の空間を描きつつ、独自の感性と観念の世界として非現実の空間を描いている。つまり人と人との関わりや自己の存在意識が薄弱になりつつある現代日本をリアリティのない希薄な現実空間として描くと同時に、人間的紐帯の確認や自己の回復の場として「存在感ある非現実空間」を描いている。この現実と非現実の空間が交錯する村上春樹の作品の空間表現そのものが彼の選んだ現代を表す方策であり、これまでの近代文学作品の空間表現と大きく異なる点である。

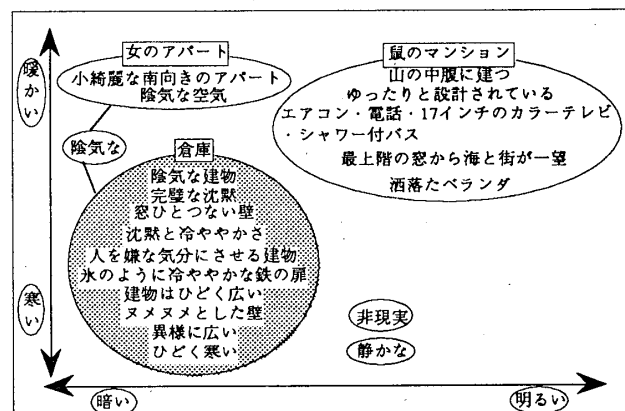


図-5 「1973年のピンボール」舞台空間意識構造図・建築編

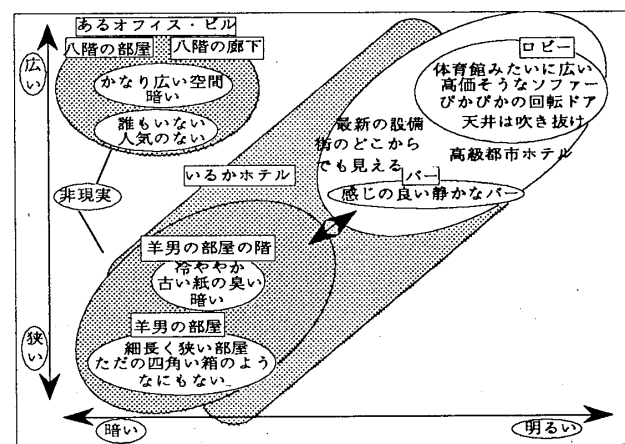


図-6 「ダンス・ダンス・ダンス」舞台空間意識構造図・建築編

*1 名古屋工業大学大学院博士前期課程
 *2 名古屋工業大学大学院博士後期課程・修士(工学)
 *3 名古屋工業大学助手・修士(工学)
 *4 名古屋工業大学教授・工学博士

Master's course, Nagoya Institute of Technology
 Dr.'s course, Nagoya Institute of Technology, Master Eng.
 Asst., Nagoya Institute of Technology, Master Eng.
 Prof., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.